

教室ですぐにつかえる「やさしい日本語」用語集の開発 —日本語指導が必要な児童にとって難しい語をいかに説明するか—

中石ゆうこ（県立広島大学）

1. 研究目的

日本語指導が必要な児童（以下、JSL児童）に対して、難しい語をいかに説明すれば理解しやすいのか。「やさしい日本語」用語集を開発するにあたり、「やさしい日本語」の語彙と小学生用の国語辞書（以下、国語辞書）の語彙を比較する二つの調査を行い、「やさしい日本語」の説明は分かりやすいのか、どのように説明すれば分かりやすいかを明らかにする。本研究の「やさしい日本語」の定義は、初級（N4、N5：旧3級、4級）レベルの語彙や文型に調整した日本語とする。例えば、「要求」という語の国語辞書（『チャレンジ小学国語辞典第5版』）の説明は「相手に強く求めること。」で、これは「相手」、「求める」が旧日本語能力試験では中級以上（N2/N3：旧2級）の語彙、「～コト」（文の名詞化）は初級（N4：旧3級）の文型となる。

2. 研究背景

研究協力機関は広島市立基町小学校と同校での放課後支援活動であった。基町小学校は全校の約60%が外国ルーツの児童である（2019年度）。漢字圏を中心にしつつ、非漢字圏の児童が混在する。JSL児童には、日本生まれで日本語が一番得意な言語で他の言語は聞いて理解できる程度の児童と、外国生まれで日本語以外の言語を家庭では主に使用する児童が存在する。放課後支援活動は県立広島大学の学生が活動の中心となり、基町小学校の多くのJSL児童が参加する。

基町小学校の国語科や日本語の取り出し授業において、特に3年生以上の学年の指導では、児童が意味を理解できなかった語について国語辞書を引かせる活動も行われている。しかし、辞書の説明が十分に理解できない児童や、説明を読んでも文の中で用いられている別の語の意味が分からず、辞書で次の語を引き続ける必要が生じる児童もいる。放課後支援活動は、1年生から6年生まで同じ教室で支援が行われ、日本語支援の留意点が模索の状態にある。

3. 調査方法

3.1. 調査材料

二つの調査を行った。一つ目は多肢選択課題である。この課題では「やさしい日本語」による説明と国語辞書の説明のいずれかを示し、その説明で選択肢から適切な語を正しく選択できるかどうかを見た。例えば、「歩道橋」、「道路」、「横断歩道」から「道路」を選んでもらうための説明は「やさしい日本語」では「車を運転する道です。」、国語辞書では「人や車が通れるようにした道。」であった。二つ目は聞き取り調査である。この調査では「やさしい日本語」による説明と国語辞書の説明を同時に示し、どちらの説明の方が分かりやすいかをJSL児童から直接聞き取った。いずれの課題も中石・建石（2016）の語彙シラバスから共通する30語を選定した。

3.2. 調査対象と実施方法

多肢選択課題は小学校で実施してもらった。JSL児童の在籍学級（2年生から6年生）で、すべての児童に冊子を配付して、クラスで一斉に回答してもらった。JSL児童は45名（3年生以上は37名）であった。聞き取り調査は放課後支援活動で実施した。6名のJSL児童に対して大学生がイン

タビュアーとなって個別に実施した。この調査では二つの説明のいずれが簡単と思うかをJSL児童に判断してもらい、大学生が理由とともに聞き取り、メモを取った。

4. 結果とまとめ

4.1. 結果と考察

多肢選択課題では、2年生はいずれの説明でも無回答や誤答が目立ったため、3年生以上の回答を集計した。「やさしい日本語」と国語辞書の説明の正答率を比較すると、「やさしい日本語」の説明の方が10%以上正答率が高かったのが11問、国語辞書の説明の方が10%以上正答率が高かったのが12問、両者の差が10%未満だったのが7問あった。この結果から、必ずしも「やさしい日本語」の説明の方が分かりやすいというわけではないことが分かる。

国語辞書の説明より正答率が低かった「やさしい日本語」の説明には、①「何か」、「多くの人」のような抽象的な語を用いている、②鍵括弧のセリフが最初に来ているという傾向があった。例えば、①「何かと何かを一緒(=一つのもの)にすること」(「合わせる」：正答率「やさしい日本語」76.5%、国語辞書100%)、②「『そうです』という意味で、頭を前後に動かします。」(「うなづく」：正答率「やさしい日本語」75.0%、国語辞書88.2%)である。「やさしい日本語」をJSL児童に対して使用する場合、書き方によっては理解がかえって難しくなる場合があることが分かる。

聞き取り調査では、「やさしい日本語」が好まれる場合もあるが、国語辞書の説明が好まれる場合もあることが分かった。ただし、分かりやすい説明がどちらかは選べるが、その理由を答えるのは難しいJSL児童が多かった。一部から得た具体的コメントとして、辞書の記述では「ぴったり」、「非常に」、「一帶」などの語が難しいという指摘があった。「やさしい日本語」の記述は説明がくどい、簡略化しすぎて正しい意味をカバーしておらず、分かりにくいという指摘もあった。

4.2. まとめと今後の課題

本研究を通して、「やさしい日本語」を好む児童と国語辞書の説明を好む児童がいることが示唆された。この結果から、日本語支援の場で一律に「やさしい日本語」、あるいは国語辞書の語釈を用いるのではなく、児童が分かりやすいと思う方を選べるように補助教材を用意することが必要だと言えるだろう。また、「やさしい日本語」で記載してあっても辞書の説明は2年生には利用が難しいことが分かった。さらに、JSL児童は分かりやすい説明を選択できても、理由まで答えるのは難しい場合があるというメタ認知の課題に関する気づきも得られた。今後、「やさしい日本語」の説明を好む児童の要因を割り出したい。また、中石・建石(2016)の語彙シラバスについて「やさしい日本語」で語釈を行った用語集を作成して、一般公開する予定である。

付記

謝辞：基町小学校の先生方、放課後活動に関わる県立広島大学諸氏に感謝する。本研究は公益財団法人博報児童教育振興会による第14回児童教育実践についての研究助成を受けたものである。

【引用文献】

国際交流基金・日本国際教育支援協会編(2002)『日本語能力試験出題基準改定版』凡人社
中石ゆうこ・建石始(2016)「外国につながる子どもたちのための語彙シラバス」森篤嗣編『現場に役立つ日本語教育研究シリーズ第2巻ニーズを踏まえた語彙シラバス』くろしお出版、pp. 231-251.